

アユの冷水病対策

(増養殖試験研究事業)

福井克也

1. 研究目的

本県のアユ冷水病は平成5年に発病が確認されて以来、依然発生しつづけ、アユ資源に重大な影響を及ぼしている。そのため被害を軽減するための防疫対策を行う。

2. 研究方法

(1) 防疫対策

冷水病防疫に対する普及啓発、来歴カードの実施、放流用種苗の保菌検査、河川内発生時の状況把握と確認検査を実施した。

(2) 来歴カード

各河川に放流される県内産及び県外産アユ種苗の来歴を把握するため、生産者、輸送業者、各河川漁業協同組合にそれぞれ記帳を依頼した。

(3) 県内産人工種苗の保菌検査

江川漁協並びに高津川漁協の生産種苗についてPCR法（ロタマーゼ法）による放流前検査を実施した。

(4) 種苗放流後の状況確認

河川内でのへい死魚の聞き取りと、種苗生産用の養成親魚並びに産卵期の天然親魚の保菌状況について検査を実施した。

3. 研究結果

県内人工種苗の保菌検査、河川での発生状況

調査、アユ種苗来歴カードの普及、情報収集等を実施した。

県内人工種苗では、3月末までに出荷・放流された種苗の検査件数は9件で、全て陰性であった。

河川における冷水病被害の発生について漁協に聞き取りを行ったが、目立った冷水病の発生は確認されなかった。しかし、10月下旬と11月上旬に江川で種苗生産用に採卵を行った天然親魚の一部を検査したところ、26尾中23尾から陽性の反応を得た。また、11月上旬に高津川の産卵場付近で採集されたアユ7検体について検査したところ、全個体で陽性の反応を得ており、依然河川内で冷水病が発生していることが確認された。

このため、天然親魚を用いて種苗生産を行う漁協に検査結果を報告するとともに、種苗生産の状況を確認するため、随時巡回指導を行った。なお、採卵用の養成親魚についても冷水病の保菌検査を行ったが、全て陰性であった。

4. 研究成果

調査で得られた結果は、関係漁協のほか内水面漁業関係者に報告した。